

18歳までに身につけた 偏見のコレクション

日本病院薬剤師会常務理事
京都大学医学部附属病院教授・薬剤部長
寺田 智祐 Tomohiro TERADA



勤務先が、滋賀から京都に変わった。健康のために電車通勤と考えていたが、コロナ禍もあり、自動車通勤している。おおむね、東海道五十三次でいうところの、草津宿から京都宿（三条大橋）の間を往復していることになる。琵琶湖の南端を回って、比叡の山を見ながら北上すると大津宿。進路を西に取り、逢坂山を越えて入洛すると、その道が四宮から三条通りと呼ばれるようになる。山科・御陵・蹴上を経て、ようやく京の中心街に入ってくる。「昔の人も同じ道を通っていたのかな〜？」と歴史ロマンに浸りたくなるが、旧東海道は、現在の主要道路に並行している。車がすれ違うのもやっとなという細い道であるが、当時では、かなり大きめの道だったのかもしれない。開発とともに、目にする景色は変わっていく。景色に限らず、歴史の常識も変わっていくようだ。「こんなに変わった歴史教科書」¹⁾では、昭和と平成、新旧2つの歴史教科書を比較しながら、記載が変わった内容を解説している。中高生のまっさらな状態で勉強し、何十年も真実だと思っていた幾つかの史実が、実は真実とは言い難いことに驚いた。代表的な項目のタイトルを挙げると、「モンゴル襲来〜2回とも暴風が吹いたのか？」や「武田信玄画像〜あの髭の武将は誰なのか？」などがある。こうなると常識ってなんだろうと思うが、冒頭のタイトルは、アインシュタインが「常識」について語った言葉である。いい得て妙である。

さて、withコロナの時代も1年が過ぎて、我々の生活スタイルも大きく変わった。黙食、マスク、ソーシャルディスタンス…、今ではこれらが常識になっている。さらに、既存の医学の常識にも、大きな課題が突きつけられている。“Happy hypoxia”²⁾という言葉をご存知でしょうか？コロナ対応にあたっていたアメリカの医師らが使っていたフレーズで、無症候性低酸素血症のことである。コロナウイルスに感染した場合、通常であれば錯乱するほどの酸素分圧の低下が起こっているにもかかわらず、普通にスマホを操作したり医師と会話をする患者が散見されるようだ。一般に、酸素分圧が低下すると、相対的に二酸化炭素分圧が上昇し、それがトリガーとなって呼吸中枢が刺激され、息切れなどの症状が現れる。しかし、コロナ患者の場合、そのトリガーが機能しなくなっているため、ゆっくりと、体内から酸素が奪われていき、容体急変の要因の1つになっている。「息切れとは何か？」という、これまで当たり前とってきた呼吸生理学的な定義が再考され始めている。

薬剤師の分野でも、タスク・シフティング、薬剤師によるワクチン接種、薬局の調剤業務の外部委託など、これまでの「業」のあり方が問題提起されている。薬剤師の業は法律で規定されているため、法令遵守は必須であるが、法律の解釈や法改正によって、これまでできなかったこと（しなかったこと）ができるようになることもある。薬機法が改正され、薬局の定義も130年ぶりに変わった。コロナ後には、新しい薬剤師の常識が待ち構えているかもしれない。最後に、アインシュタインの言葉をもう1つ：「大切なのは、疑問を持ち続けること」。柔軟な発想で、新しい常識をつくり出していききたいものだ。

1) 山本博文ほか：こんなに変わった歴史教科書，新潮社，東京，2011。

2) J Couzin-Frankel：The mystery of the pandemic's 'happy hypoxia'，*Science*，368，455-456（2020）。